

就学後の学習困難が心配される幼児の知能・認知機能の特徴

—WPPSI と DN-CAS による就学前後の結果から—

○杉浦采夏

橋本創一

(東京学芸大学教育学研究科)

(東京学芸大学教育実践研究支援センター)

KEY WORDS: 就学前児 学習困難 認知発達

【目的】

発達障害などの特別な教育的ニーズを必要とする子どもたちは、物事のとらえ方の発達に遅れや偏り、あるいは歪みがあることで授業場面が苦しくなり、学習場面で種々の困難として表面化しやすい。授業場面や学習場面でどのような困難を抱えているのだろうか。そこで本研究では、民間の療育機関での指導前後の学習面にかかわる知能・認知特性とその構造的な特徴について調査した。

【方法】

対象児:

民間の療育機関で、就学後の学習困難を心配した保護者の主訴にもとづき、知的発達の遅れがない、または IQ60 程度の軽い遅れのある子どもを対象として、就学準備性の形成を目標にアカデミックスキルの準備教育（つまりき予防支援）を実施した年長児（指導後；小学校 1 年生）29 名（男児 20 名、女児 9 名）であった。

検査と手続き:

指導前である就学 1 年前（年長時）の 5 月と、指導後の就学直後の 4 月（小学校 1 年生）に、WPPSI と DN-CAS の検査を実施した。

なお、本研究の発表において、協力者から了解を得た上で個人情報に十分留意し、倫理的配慮を行った。

【結果】

1. 対象児の学習面にかかわる知能・認知特性による分類

対象児の学習面にかかわる知能・認知特性とその構造的な特徴を見出すために、指導前後の WPPSI (VIQ, PIQ) と DN-CAS (プランニング, 同時処理, 注意, 継次処理) の結果において、それぞれクラスタ分析 (Ward 法, 平方ユークリッド距離) を行った。3~6 クラスタで検討したところ、解釈可能性の観点から 5 クラスタが適切と判断された。クラスタ分析の際、標準化された得点について、100 を基準としたグラフに直したものを指導前を図 1, 指導後を図 2 に示す。クラスタの特徴を確認するにあたって、100 を基準としたときに $\pm 1SD$ である 85, 115 と基準である 100 を目安としてクラスタの特徴を表した。

指導前のクラスタは、CL1 動作性弱さ群, CL2 継次処理弱さ群, CL3 言語理解弱さ群, CL4 言語能力・処理弱さ群, CL5 全般的な弱さ群と命名した。

指導後のクラスタは、cl 1 言語的強さ群, cl 2 全般的知能強さ (認知・処理弱さ) 群, cl 3 視覚的な強さ群, cl 4 全般的な強さ群, cl 5 その他群と命名した。

2. 指導前後での知能・認知特性における対象児の推移

クラスタごとの指導前における対象児の人数は、CL1 が 7 人、CL2 が 3 人、CL3 が 10 人、CL4 が 7 人、CL5 が 2 人であった。指導後における対象児の人数は、cl 1 が 7 人、cl 2 が 9 人、cl 3 が 6 人、cl 4 が 5 人、cl 5 が 2 人であった。指導前から指導後における対象児の推移は、図 3 に示したとおりであった。クラスタは、指導前後でそれぞれ独立しており、指導前後で対応している訳ではない。指導前は、対象児の弱みに焦点を当て、指導後は対象児の強みに焦点が当たるようなクラスタとなっている。

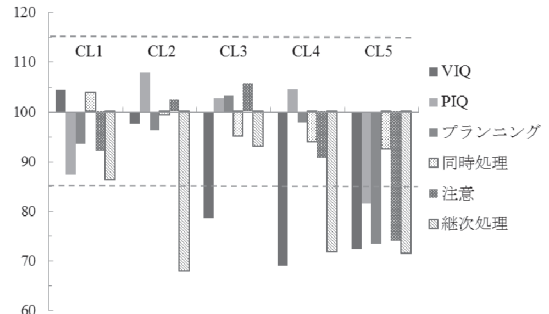


図 1 指導前の指導児の得点プロフィール

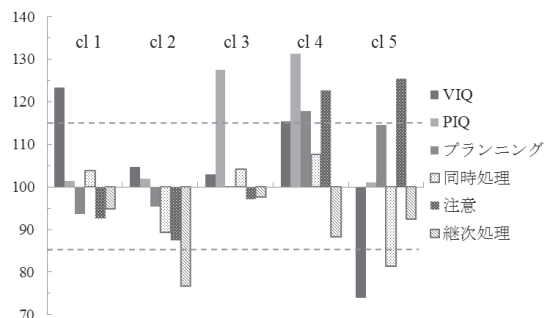


図 2 指導後の指導児の得点プロフィール

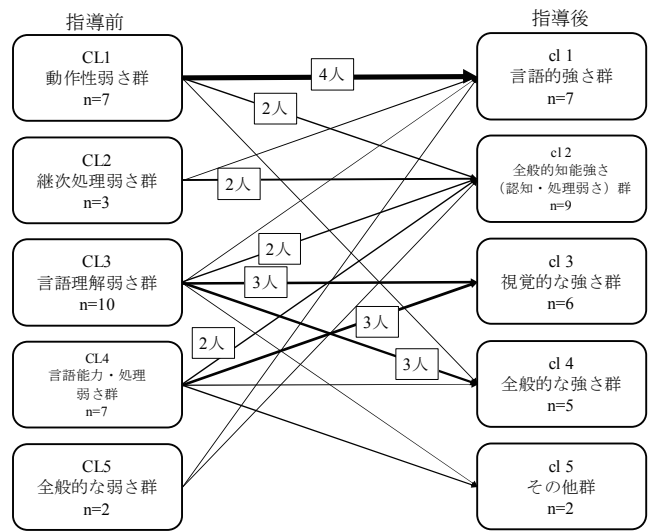


図 3 指導前後の指導児の推移

【考察】

指導前に比べ、指導後の得点プロフィールは上がっており、概ね認知機能が平均値に近づいたと考えられる。しかし、元々強く困難さのみられていた VIQ や継次処理については、指導後も困難さが残る結果となった。指導前の対象児の姿は、保護者にとって心配な面があり指導に連れてきている。そのような保護者からの働きかけや、幼稚園、保育園等でのかかわりを通して、様々な準備をしたあとの就学後の姿が、学習面にかかわる知能・認知特性とその構造的な特徴に関するプロフィールに表われたと考えられる。

(SUGIURA Saika, HASHIMOTO Soichi,)